仏教考察

Thinking of Buddhism

宇野正三
Shozo UNO

有為と無為

仏教と言えば、諸行無常や諸法無我などの文言が人口に膾炙している。併し、このような理解は仏法の肯綮に中っているのであろうか。釈尊の直説を伝えているとされる阿含経典は次のように説いている。

「世尊諸の比丘（出家得度して具足戒を受けた男性）に告げたまわく『当に色（物質・肉体）は無常なりと観るべし。是の如く観るものは則ち正観とす。正観するものは則ち厭離を生ず、厭離するものは喜貪（貪り欲すること）尽く（無くなる）。喜貪尽くるものは心解脱すと説く。是の如く受（感受作用）、想（表象作用）、行（意志作用）、識（認識作用）は無常なりと観る。是の如く観るものは則ち正観とす。』」（『雑阿含経』、大正蔵経、第 2 巻、1 頁上）「色は無常なり、無常なるは即ち苦なり（無常であるので、持続的な安楽をもたらさないから苦）、苦なるは即ち非我（無我）なり（苦が生じるのは真我が把握されていないからである）、非我なるもの亦我所に非ず（無常なものは本当の自己ではない）。是の如く観るものを真実に正観すると名づく。」（同、大正蔵経、第 2 巻、2 頁上）「如来は二辺を離れて中道を説く、所謂此れ有るが故に彼有り、此れ生ずるが故に彼生ず。謂ゆる無明に縁りて行（潜在的形成力）有り、乃至（かくして）、生老病死憂悲悩苦集まる、所謂此れ無きが故に彼無し、此れ滅するが故に彼滅す。謂ゆる無明滅すれば則ち行滅し、乃至（かくして）、生老病死憂悲悩苦滅す。」（同、大正蔵経、第 2 巻、67 頁上）「聖弟子は此の（色・受・想・行・識から成る）五受陰（五蘊）（身心を構成する五つの要素）を我・我所に非ず（実体でもないし、本当の自己でもない）と観ず。是の如く観ずる時、諸世間に於いて取著（執着）する所無し。取著する所無き者は自ら涅槃（安心の境界）を得。我が生已に尽き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知らん（迷いの生存は終わった、仏道修行は成就した、為すべきことは成し遂げた、もはや迷妄の生存に堕することはない、と知るであろう）。」（同、大正蔵経、第 2 巻、70 頁中）「此の色は壊する有り、受・想・行・識は壊する有るが故に我に非ず、我所に非ず。」（同、大正蔵経、第 2 巻、16 頁下）「無常なるものは是れ有為の行なり。」（同、大正蔵経、第 2 巻、20 頁中）「世尊は涅槃の為の故に弟子の為に説法したまえり（釈尊は涅槃の境地に達せしめるために弟子に説法するのである）。」（同、大正蔵経、第 2 巻、37 頁上）「一時、仏、波羅栴（ベナレス）の仙人住処鹿野苑の中に住ま

りたまえり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまわく、『四聖諦（四つの真理）有り、何等をか四と為す。謂ゆる苦聖諦（迷いの生存は苦であるという真理）・苦集聖諦（苦の原因は現象への執着であるという真理）・苦滅聖諦（執着心を克服した、苦の無い涅槃の境地が理想であるとの真理）・苦滅道跡聖諦（八正道によって涅槃の境地に達することが出来るとの真理）なり。若し比丘、苦聖諦に於いて、已に知り已に解し、苦集聖諦に於いて已に知り已に断じ、苦滅聖諦に於いて、已に知り已に証し、苦滅道跡聖諦に於いて已に知り已に修せる、是の如き比丘は、阿羅漢と名づく。』」（同、大正蔵経、第 2 巻、104 頁中－下）「凡夫界とは是れ無明界なり（迷っている人は真如〔本体界〕に無知な人である）。」（同、大正蔵経、第 2 巻、117 頁上）「諸行は無常にして、皆是れ変易の法（変化する存在）なり。」（同、大正蔵経、第 2 巻、121 頁上）「若し比丘の諸の悪不善法生ずるは、一切皆無明を以て根本と為す。（中略）無明とは無知なり。（中略）実の如く知らざるが故に邪見を起こす。（中略）若し諸の善法の生ずるは一切皆、明（真如に目覚めること）を以て根本と為す。（中略）実の如く知らば是れ則ち正見なり。」（同、大正蔵経、第 2 巻、198 頁中－下）「一切の行は無常なり。一切の行は不恒・不安・変易の法なり。諸比丘、一切の行に於いて厭離を生じ解脱を求楽すべし。」（同、大正蔵経、第 2 巻、243 頁中）「若し縁起（現象は他の存在との依存関係にあること）を見れば便ち法（真理）を見、若し法を見れば便ち縁起を見る。」（『中阿含経』、大正蔵経、第 1 巻、467 頁上）「阿難、我本汝が為に六界（六大）を説きぬ、地界・水・火・風・空・識界なり。」（同、大正蔵経、第 1 巻、562 頁下）「無明に因りて則便ち漏（煩悩）有り。（中略）無明滅すれば漏便ち滅す。」（同、大正蔵経、第 1 巻、599 頁中－下）「阿難、二界を見、如真（存在の実相）を知る。有為界・無為界、阿難この二界を見、如真を知る。」（同、大正蔵経、第 1 巻、723 頁下）「阿難、若しは比丘有りて因縁（因＝現象の直接的原因、縁＝現象の間接的原因）及び従因縁起を見、如真を知る。此れに因りて彼有り、此れ無ければ彼無し。此れ生ずれば彼生じ、此れ滅すれば彼滅す。」（同、大正蔵経、第 1 巻、723 頁下）「現在に無為を得已って、諸の憂畏を度せば（脱すれば）、決定して般涅槃なり（必ず涅槃が得られる）。」（『長阿含経』同、大正蔵経、第 1 巻、127 頁上）「如来の法身は敗壊せず。」（『増壱阿含経』、大正蔵経、第 2 巻、550 頁上）「有漏は是れ生死、無漏は是れ涅槃なり。」（同、大正蔵経、第 2 巻、659 頁上）「色は無常なり、無常なれば即ち是れ苦なり、苦なれば即ち是れ無我なり。無我なれば即ち是れ空なり（実体性が無い）、空なれば彼（色）は我有に非ず（実体には属さない）、我は彼の有に非ず（実体は色ではない）。痛（受）・想・行・識及び五盛陰（五蘊）は皆悉く無常なり、無常なれば即ち是れ苦なり、苦なれば無我なり、無我なれば是れ空なり、空なれば彼我有に非ず、我は彼の有に非ず、我の教誡は其の義是の如し。」（同、大正蔵経、第 2 巻、715 頁下）「一切諸行は皆空、皆寂（本質に於いては無相の涅槃の世界）にして、起こる者、滅する者皆是れ幻化にして真実に有ること無ければなり（生滅するものは幻の如きもので、真実の存在ではない）。」（同、大正蔵経、第 2 巻、742 頁上）「諸法を観察し已って便ち空三昧（無相の本体界を体得すること）を得、已に空三昧を得ば、便ち阿耨多羅三藐三菩提（悟り）を成ぜん。」（同、大正蔵経、第 2 巻、

773 頁下）

有為・無為説は大乗経典にもある。「一切法とは略して二種有り、一には有為、二には無為なり。」（『解深密経』、大正蔵経、第 16 巻、688 頁下）

有為（梵語 saṃskṛta）とは、「造られたもの」の意で、限定された、時間によって変化する現象存在を指す。無為（梵語 asaṃskṛta）とは、「造られたものではないもの」を意味し、限定されておらず、変化しない永遠的・本体的存在を指す。永遠的存在は、時間的に制約されていないから無限の存在である。無限は複数存在しないから、一なる存在である。時間的存在は制約されているから有限的存在で、複数存在する。仏教では、存在界は、この有為と無為から成っていると考える。仏教の重要な教説である「諸行無常」の行（梵語 saṃskāra）は「形成されたもので、生滅変化する現象存在」を意味し、有為と同じものである。有為は無為の限定によって生じる。これら両者の関係について『華厳経』を見てみよう。同経に於いて、無為は法身仏である毘盧遮那仏（盧舎那仏）と称される。

「如来の境界は辺際無く（時空的限りが無い）、世間にて自在なれば無上と称す。」（『華厳経（六十巻）』、大正蔵経、第 9 巻、397 頁中）「仏身は空の如く尽くすべからず、無相無礙にして普く示現し（至るところに現れる）、応現すべき所幻化の如く、神変（仏の不思議な働き）の浄音周ねからざる靡し（仏の説法があらゆるところに響き渡る）。仏身の無辺なること虚空の如く、智光の浄音も亦是の如し。」（同、大正蔵経、第 9 巻、399 頁中）「如来の法身は法界（本体界）に等しく、普く衆生に応じて悉く対現したまい、」（同、大正蔵経、第 9 巻、399 頁中）「如来の法身は甚だ弥曠なり、十方に周遍して涯際無し（法身＝本体界は無限の世界である）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、400 頁下）「衆生一たび如来の身を見たてまつれば、悉く能く衆の煩悩を断除し、一切の諸の魔事を遠離す、是を清浄の妙境界と名づく（法身＝本体界を見れば正覚が得られる）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、400 頁下）「仏界は無辺にして尽くすべからず。」（同、大正蔵経、第 9 巻、402 頁上）「盧舎那仏の大智海は、光明普く照らして量有ること無く、如実に真諦の法を観察して、普く一切の諸の法門を照らす。」（同、大正蔵経、第 9 巻、405 頁下）「法身は一切の刹（世界）に充満し、普く一切諸法の雨を雨らし、法相は不生にして亦不滅なり、悉く一切諸の世間を照らす。（中略）法身堅固にして壊すべからず、一切諸の法界に充満し、普く能く諸の色身を示現し、応に随いて諸の群生（生きとし生けるもの）を化導したまう（教化して悟りに導く）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、408 頁上－中）「盧舎那仏の此土は清浄にして衆宝もて成就し、辺際有ること無し（無限である）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、410 頁上）「一一の塵（極小のもの）の中に、一切の刹を現ず。（極小のものも本体に於いて無限であるので、万象を包含する。）」（同、大正蔵経、第 9 巻、410 頁下）「一切諸の世間は、皆妄想より生ず（無明に基づく現象界は迷妄の世界である）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、424 頁下）「一切所著無ければ、乃ち真の如来を見たてまつる（現象への執着を断てば、法身を見ることが出来る）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、426 頁下）「法性は分別するに実に不可得なり（本体界は無限定の世界で、限定的には把捉できない）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、428 頁上）「真実に二相無し（真実は二元対

立を超えている)、法性は清浄なるが故に、法性は自ら清浄にして、無相なること虚空の如く、一切能く説くこと無し。」(同、大正蔵経、第 9 巻、443 頁上)「清浄の法身は一にして、普く一切の世に応ず。湛然(静寂なこと)として常に動ぜず、十方に現ぜざること無く、」(同、大正蔵経、第 9 巻、455 頁上)「一切の諸法は、但是れ虚妄にして、真実有ること無く、須臾も住せざれば、堅固有ること無し。猶し幻化の如く愚夫を欺誑す(凡夫は欺かれて迷妄の世界を真実界と妄分別する)。一切法は夢の如く電の如しと悟る。」(同、大正蔵経、第 9 巻、467 頁中)「菩薩は是の如きの念を作さく、『一切の衆生は無性を性と為し、一切の諸法は無為を性と為し、一切の仏刹は無相を相と為し、三世を究竟するに(過去・現在・未来を究明するに)皆悉く無性(無限定の相)にして、言語の道断え、一切の法に於いて所依無し(無為は他に依存しないで存在する)』と。」(同、大正蔵経、第 9 巻、469 頁上)「一切の世間は縁より起こる、因縁を離れて諸法を見ず。」(同、大正蔵経、第 9 巻、497 頁上)「妄取するが故に法有り、取せざれば則ち寂滅なり。仏子是の如く知れば、法は空にして自性無く、諸法に自性無ければ、最勝は無我を覚る。」(同、大正蔵経、第 9 巻、528 頁上)「諸法の本性は空にして、毫末の相有ること無く、空は分別有ること無く、同なること虚空の若如し。去住の相有ること無く(変化しない)、亦戯論有ること無く(迷謬を超えている)、本来常に清浄にして、如如無分別なり(真如は自らの中に差別〔違い〕の無い、平等な世界である)。」(同、大正蔵経、第 9 巻、558 頁上)「実の如く第一義(真如)を知らざるが故に無明有り。」(同、大正蔵経、第 9 巻、558 頁中)「法身は所依無し(法身は自らに依って有る実体である)。」(同、大正蔵経、第 9 巻、615 頁下)「仏身は、実に非ず虚に非ず、有に非ず無に非ず、有性に非ず無性に非ず、色に非ず無色に非ず、相に非ず無相に非ず、生に非ず滅に非ずと解知し、如来は実に所有無く亦有相を壊せずと解知す(悟りの世界は対立を超えた無限定の境界であり、壊れない)。」(同、大正蔵経、第 9 巻、645 頁中)「盧舎那仏は一一の相の中より、一切の仏刹微塵に等しき相を出し、一切諸の世界海に充満したまえり(森羅万象は法身仏の表われ=現われである)。」(同、大正蔵経、第 9 巻、735 頁中)「十種の因縁を以ての故に一切世界海は已に成じ、現に成じ、当に成ずべし。何をか十と為す、所謂如来の神力の故に、(世界は法身仏の神力によって存在する)」(『華厳経(八十巻)』、大正蔵経、第 10 巻、35 頁上)「所謂一即多と説き、多即一なりと説き、」(同、大正蔵経、第 10 巻、85 頁上)「正覚は量る可からず。法界虚空に等しく、深広にして涯底無く、言語の道悉く絶す(無限・無限定の世界は言語によって表現できない)。」(同、大正蔵経、第 10 巻、122 頁下)

有為の現象界を<幻の如きもの>とする表現は仏典に屢々見られる。これは無為の世界を真実在と考える立場から、有為の世界(これを世間とも謂う)を真実でない世界として、<幻の如きもの>と形容するのである。決して、現象界が存在しないと言うのではない。蜃気楼などを除いて現象界は断じて幻ではない。勿論、現象の全てが迷妄ということもない。現象界を貶める言説は、無常の世界への執着を断たしめ、無為の世界に目覚めさせようとの慈悲行なのである。無為に覚醒すれば、苦の生存から脱することが出来る。これが無明を明

に転じれば苦が滅する、の意味である。

空について

仏教では、空（梵語 śūnya）に目覚める智慧を般若（梵語 prajñā）と謂う。

般若について詳述している『大般若経』の所説を引用する。

「若し菩薩摩訶薩、一切の煩悩の習気（行為が心に残す習慣性）を抜かんと欲せば、応に般若波羅蜜多を学すべし。」（『大般若経』、大正蔵経、第 5 巻、12 頁下）「舎利子、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識は空に異ならず、空は受・想・行・識に異ならず、受・想・行・識は即ち是れ空、空は即ち是れ受・想・行・識なればなり。何を以ての故に、舎利子、是の諸法の空相は不生不滅・不染不浄・不増不減・過去に非ず、未来に非ず、現在に非ざればなり。」（空である無限定の存在と限定の存在は一体である。空界は対立を超えた世界である。）（同、大正蔵経、第 5 巻、22 頁中）「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時は、応に本性空を以て一切諸法を観ずべし。」（同、大正蔵経、第 5 巻、209 頁上）「諸法は本来自性清浄なり（有為の本体は清らかな世界である）。」（同、大正蔵経、第 6 巻、749 頁下）「一切法は皆空を以て自性（性質）と為し、一切法は皆無相を以て自性と為し、一切法は皆無願（欲望の世界を超えていること）を以て自性と為す。」（同、大正蔵経、第 6 巻、880 頁上）「二辺に著するが故に生死を解脱せず、道無く涅槃無し（対立の何れかに執着するのは迷いの生存の特質である）。」（同、大正蔵経、第 6 巻、915 頁上）「一切法に於いて如実に見る時、一切法に於いて都て所得無し。一切法に於いて所得無き時、則ち如実に一切法の空なることを見る（空界は無限定の世界で、限定的には把握出来ないので無所得である）。」（同、大正蔵経、第 6 巻、1,045 頁下）「無為界とは即ち諸法空なり。」（同、大正蔵経、第 6 巻、1,057 頁下－1,058 頁上）「空は即ち無尽なり、空は即ち無量なり、空は即ち無辺なり。」（同、大正蔵経、第 7 巻、904 頁上）「諸法は生ずと雖も真如は不動なり。真如は諸法を生ずと雖も而も真如は不生なり。是れを法身と名づく。清浄不変なること虚空の無等等（等しいものが無い）なるが如し。」（同、大正蔵経、第 7 巻、937 頁下）「世間の諸法は皆因縁に生ずればなり。（中略）因縁和合するを諸法生ずと説き、因縁離散するを諸法滅すと説く。」（同、大正蔵経、第 7 巻、948 頁下）

『勝鬘経』や『大般涅槃経』は如来蔵、仏性、不空思想を展開し、無限・永遠の世界へと志向させる。

「涅槃界とは即ち是れ如来の法身なり。」（『勝鬘経』、大正蔵経、第 12 巻、220 頁下）「如来蔵に生有り、死有るには非ず、如来蔵は有為の相を離る、如来蔵は常住（永遠の存在）にして不変なり。是の故に如来蔵は、是れ依たり、是れ持たり、是れ建立たり（如来蔵は有為を依らしめ、保持し、成立させる）。」（同、大正蔵経、第 12 巻、222 頁中）「如来蔵とは、是れ法界蔵なり、法身蔵なり、出世間上上蔵なり、自性清浄蔵なり。此の性清浄の如来蔵、而も客塵煩悩（無明）と上煩悩（無明に淵源する種々の煩悩）とに染せらる、不思議の如

来の境界なり。」（同、大正蔵経、第 12 巻、222 頁中）

「世間の人は、楽の中に苦を見、常に無常を見、我に無我を見、浄に不浄を見る。是を顚倒（逆さまな見解）と名づく。」（『大般涅槃経（四十巻）』、大正蔵経、第 12 巻、377 頁下）「如来も亦爾なり。不生不滅・不老不死・不破不壊なり、有為法に非ず。」（同、大正蔵経、第 12 巻、392 頁上）「我見とは名づけて仏性と為す（仏性は実体である）。」（同、大正蔵経、第 12 巻、395 頁中）「如来は即ち是れ常住、有為は即ち是れ無常なり。」（同、大正蔵経、第 12 巻、401 頁下）「仏性を見るに因りて、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得（仏性を見ることが悟りである）。」（同、大正蔵経、第 12 巻、405 頁上）「一切衆生悉く仏性有り、即ち是れ我（実体）の義なり。是の如きの我の義や、本より已来、常に無量の煩悩に覆わる。是の故に衆生は、見ることを得ること能わず。」（同、大正蔵経、第 12 巻、407 頁中）「常有り、楽有り、我有り、浄有り。是れ則ち名づけて実諦の義と為す（真実界は常楽我浄の世界である）。」（同、大正蔵経、第 12 巻、443 頁中）「一切の有為は皆是れ無常なり。虚空は無為なり、是の故に常と為す。仏性は無為なり、この故に常と為す。虚空とは即ち是れ仏性、仏性とは即ち是れ如来、如来とは即ち是れ無為、無為とは即ち是れ常、」（同、大正蔵経、第 12 巻、445 頁下）「仏性を見るが故に、大涅槃を得。」（同、大正蔵経、第 12 巻、467 頁中）「諸仏世尊に二種の法有り。一つには世法、二つには第一義法なり。世法は則ち壊滅有り、第一義法は則ち壊滅せず。復二種有り。一つには無常無我無楽無浄、二つには常楽我浄なり、無常無我無楽無浄には則ち壊滅有り、常楽我浄には則ち壊滅無し。」（同、大正蔵経、第 12 巻、472 頁上）「智とは空と及び不空と、常と無常と、苦と楽と、我と無我とを見る。空とは一切の生死なり。不空とは大涅槃を謂う。乃至無我とは即ち是れ生死なり、我とは大涅槃を謂う。一切空を見て不空を見ざれば、中道と名づけず、乃至、一切無我を見て我を見ざれば、中道と名づけず。」（同、大正蔵経、第 12 巻、523 頁中）

空には積極面と消極面がある。前者を不空、後者を但空（又は偏空）と称する。仏教の難しさは、物の見方が単純でない処にある。既述したように、有為の根底に無為が有り、現象存在は無為と有為の両面をもち、無為が実体、有為は絶えず変化しており、実体性を有しない。この実体面が不空であり、不変の性質をもたない面が但空である。真実の空は不空と但空との統一体である。諸法が自性をもたない、と説かれるのは、自性（梵語 svabhāva）は固定的な不変の性質を意味し、これは実体にしか当て嵌まらないから、有為としての現象存在には自性が無いと言われるのである。併し、現象に実体としての自性は無いとしても、現象の各個には特性、個性は有り、自性はまた、これらの性質も意味する。只、現象の性質は無常で変化するものであるということである。存在の対立する二辺の何れにも偏しない見方を中道とか中観と謂う。また、空は限定的に把捉できないので、虚空に喩えられる。平等・無相の空を捉えるのは分別智ではなくて、無分別智である。無為は法身と同義であり、それは無相、無性、無所得とか不可得とか言われる。更に、無為は平等なる一の世界であり、有為は多数ある差別の世界である。無為に媒介されて、万象の有為は一体性を成す。這般の事情は平等即差別、一即多と表される。無為は限定されていないので無限であり、有為は限

定された存在であるので、有限である。時間的には無為は永遠の存在で、有為は転変する時間的存在である。無為の世界に無知なることを無明と謂う。無常観を通して現象存在への執着を断たしめ、無為の世界の覚醒に導くのが、阿含経典などが説く悟りへの一つの道である。

有為が因縁生であるとの事態は、有為は無為に因（依）って現出し、また、他のあらゆる有為と依存関係にあることを示している。無為は自らに依って有るので実体であり、有為は他の存在に依って有るので実体ではない。有為の相互依存性は根源的には、無為によって成立する有為間の一体性に基づいている。

唯識説

唯識説は『華厳経』に説く、三界唯心の教えに大きく依拠している。

「有らゆる諸法は皆心に由って造る。」（『華厳経（六十巻）』、大正蔵経、第 9 巻、460 頁上）「心は工なる画師の如く、種種の五陰を描き、一切世界の中に、法として造らざる無し。（中略）諸仏は悉く、一切は心より転ずと了知したまう。若し能く是の如く解らば、彼の人は真の仏を見たてまつらん。」（同、大正蔵経、第 9 巻、465 頁下－466 頁上）「三界（欲界・色界・無色界のことで、迷いの世界を意味する）は虚妄にして、但心の作なり（心が作った世界である）。」（同、大正蔵経、第 9 巻、558 頁下）「諸の世間は悉く仮の施設にして、一切は皆、是れ識心の所起なることを知る（現象界は我々の心によって捉えられた仮の世界である。真如が真実界である）。」（『華厳経（八十巻）』、大正蔵経、第 10 巻、402 頁下）

このような教理に立脚した、唯識思想を代表する経典である『解深密経』と『入楞伽経』の教説は次のとおりである。

「我が説く勝義（真如）は是れ諸の聖者の内自の所証なり。（中略）勝義は一切の尋思（思慮分別）の境相に超過す。」（『解深密経』、大正蔵経、第 16 巻、689 頁下）「若し因より生ぜば、応に是れ有為なるべし。若し是れ有為ならば、応に勝義に非ざるべし。」（同、大正蔵経、第 16 巻、692 頁上）「此れに由って真如勝義法無我の性は、因有りと名づけず、因の所生に非ず、亦有為に非ず、是れ勝義諦なり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、692 頁上）「此の識を亦阿陀那識とも名づく、何を以ての故に、此の識は身に於いて随逐し（身の根底に常に存在し）、（自らが現出した心的現象の全てを）執持する（保持する）に由るが故なり。亦、阿頼耶識とも名づく。（中略）亦名づけて心とも為す。」（同、大正蔵経、第 16 巻、692 頁中）「阿陀那識を依止（依り所）と為し、（中略）六識身転ず（六種の識が生じる）。謂わく眼識と耳鼻舌身意の識となり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、692 頁中）「謂わく諸法の相に略して三種有り、何等をか三と為す。一には遍計所執相（遍計所執性）、二には依他起相（依他起性）、三には円成実相（円成実性）なり。云何が諸法の遍計所執相なる。謂わく一切法の名仮安立の自性と差別となり（無為を知らず、諸有為が互いに異なる諸個として存在するとし、相互依存的関係於いては捉えられておらず）、乃至（また）言説を随起せしむるが為なり（言語によって認識されている仮の世界である）。云何が諸法の依他起相なる、謂わく一切法の縁生の自性（性質）なり（万有が他に依って成り立っている在り方である）、則ち此れ有るが

故に彼有り、此れ生ずるが故に彼生ず。謂わく無明は行に縁たり、乃至（かくして）純大苦蘊を召集す（苦を生ずる）。云何が諸法の円成実相なる、謂わく一切法の平等の真如なり。此の真如に於いて諸の菩薩衆、勇猛精進を因縁と為るが故に、如理に作意し（心を働かせ）、無（顚）倒に思惟することを因縁と為るが故に、乃ち能く通達す（真如を体得する）。此の通達に於いて漸漸に修集し（功徳を身に集め）、乃至無上正等菩提を方に証すること円満なり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、693 頁上）「若し諸の菩薩能く依他起相の上に於いて、如実に無相の法を了知せば、即ち能く雑染相の法を断滅し、若し能く雑染相の法を断滅せば、即ち能く清浄相の法を証得す」（同、大正蔵経、第 16 巻、693 頁下）「」一切諸法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本来寂静にして自性涅槃なり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、694 頁上）

「諸法の体は是の如し。唯自心の境界にして、内心に能く証知す。而も諸の凡夫等は、無明覆障せられて（根本的無知に気付かず）、虚妄心にして分別し、覚知すること能わず。」（『入楞伽経』、大正蔵経、第 16 巻、516 頁中）「毛道（愚者）の凡夫は虚妄に分別す。法は本より無相なり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、518 頁中）「寂滅は名づけて一心と為し、一心は名づけて如来蔵と為す。自内身の智慧境界に入らば、無生法忍三昧（真如に到達した境地）を得ん。」（同、大正蔵経、第 16 巻、519 頁上）「自相阿梨耶識は滅せざるなり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、522 頁上）「諸法は唯心なりと、当に是の如く知見すべし。三界は無始世来の虚妄分別戯論に因って有るが故に。如来地は寂静不生なりと観ずるが故に。」（同、大正蔵経、第 16 巻、522 頁下－523 頁上）「執著虚妄の相は、分別心の薫習（存在を個々に分けて認識する習慣性）に因るを以ての故なり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、525 頁中）「一切諸法の自体の相は不生なり。是れ内身に証する聖智の境界なるが故に（勝れた智慧は現象の本体の永遠性を自覚する）。」（同、大正蔵経、第 16 巻、526 頁下）「我は（中略）唯、自心に分別して可取、能取の境界の相有るを見るのみなりと説く（自分の心の中で、主観と客観を成り立たせている）。」（同、大正蔵経、第 16 巻、548 頁上）「唯心のみにして外法なし（我々にとって存在するのは心が捉えた現象であって、物自体ではない）。」（同、大正蔵経、第 16 巻、549 頁上）「諸の菩薩摩訶薩は、虚妄分別の心を遠離し、能取・可取の境界を遠離する（自心が造り出した主観・客観を超えること）を、涅槃に入ると名づく。如実智を以て一切の諸法の唯是れ自心なるを知る、是の故に分別の心を生ぜず。」（同、大正蔵経、第 16 巻、555 頁上－中）「阿梨耶識は、如来蔵と名づく。」（同、大正蔵経、第 16 巻、556 頁中－下）「善不善の法と言うは、所謂八識なり。何等をか八と為す。一には阿梨耶識（阿頼耶識）、二には意（末那識・小我を自己と思っている意識）、三には意識、四には眼識、五には耳識、六には鼻識、七には舌識、八には身識なり。」（同、大正蔵経、第 16 巻、559 頁中）「実体は不生の法なり、是れを観ずれば解脱を得ん（永遠の存在で、実体である無為を知れば、迷妄の生存から脱する）。」（同、大正蔵経、第 16 巻、567 頁中）

唯識説は、森羅万象は我々の心から現出しているとし、この心を阿梨耶識又は阿頼耶識と称し、万物をこの識の精神現象と考える。この立場は、外物を否定する唯心論かと言えば、

そのように断定はできない。主観にとっての外界を境（きょう）と言うが、これは認識主体の認識機能と相関的である。他の動物には人間が知覚出来ない事象を認識し得るものがいる。これらの動物と我々の認識世界の様相は同じではないのである。カントは我々が認識できるのは自己の主観が構成した現象のみで、純客観である物自体（Ding an sich）は認識不可能と考えた。外界としての境は正にカントの謂う現象に当たる。唯識説は阿頼耶識が自己に見せしめる認識内容は純客観ではなく、主観と相関的な現象であることを指摘するのみで、純客観の存在を否定してはいないのである。随って、唯識説に於いて他我の存在も成立し得る。また、釈尊は阿含経典に於いても五蘊説や六大説を説き、世界を構成する要素として精神的存在だけでなく、物質的存在も認めている。阿頼耶識は意識現象の種（たね）である種子（しゅうじ）を蔵しており、自己に於いて種々の意識現象を顕現せしめ、自己及び環境世界が出現する。唯識説は存在の見方に三種有ると説き、その内容は遍計所執性、依他起性、円成実性の三性である。遍計所執性とは存在を個的に把握し、無為を知らずに有為のみを認識することである。依他起性とは、諸存在を関係性に於いて捉え、他に依って有ると把握することである。円成実性とは、有為の根底の無為に気付き、諸存在の一体性に目覚めていることである。認識世界の源である阿頼耶識は精神的原理であるが、如来蔵と同一視されるように、根底に永遠界を宿している。唯識説に於いて、悟りとは一切の現象の元である阿頼耶識を自覚することであり、究極的には精神性を超えた無相の無為の世界に目覚めることである。唯識説は観念論的に世界を説明するが、根源に於いては観念的世界を突破することを認めているのである。仏教は決して一切が精神的なものとする唯心論ではない。

註

・経典からの引用箇所は引用文の後に、経典名と大正新脩大蔵経（大正蔵経と略記）の巻数と頁数で示した。
・引用に当たり、旧字体は新字体に改めた。
・論文中の漢字の振り仮名は筆者が付した。
・論文中の丸括弧内の説明は筆者が付した。
・経典名は、筆者が二重括弧で囲んだ。

要旨
Summary

仏教は次のように説く：世界は有限の諸存在と一つの無限の存在から成る。有限の存在は無限の存在の表われ或は現われである。有限の存在は限定されたもので、変化しており、時間的である。無限の存在は無限定のもので、変化せず、永遠である。仏教は無限の存在に目覚めることを目指す。我々は、この目覚め（日本語では「悟り」と呼ばれる）によって涅槃の境地に達する。悟りは我々に苦しみを超えた幸せな人生をもたらす。

仏教は永続する幸せを獲得する道である。

仏教はまた、精神的存在と物質的存在を認めている。さらに、仏教は我々にとっての外界は我々の認識能力によって影響されていると考える。すなわち、我々にとっての外界はカントが使用した意味での物自体ではないとするのである。このような見地に基づいて、仏教の唯識説は、現象界は自己の心の産物であると言う。随って、この説は、純客観としての外界の存在を否定しておらず、他我の存在も否定はしないのである。

Buddhism preaches as follows: The world is composed of finite beings and an infinite being. Finite beings are expressions or appearances of an infinite being. The former beings are determinate, changing, and temporal. The latter being is indeterminate, unchanging, and eternal. Buddhism aims at awakening to an infinite being. We attain a state of spiritual peace (*Nirvana*) by this awakening (called *Satori* in Japanese). *Satori* brings us a happy life beyond pain.

Buddhism is a path to acquire everlasting happiness.

Buddhism also accepts mental beings and physical beings. Further, Buddhism thinks that the world that is external to us (the phenomenal world) is influenced by our cognitive ability; that is, it is not the thing in itself (*Ding an sich*) used by Kant. Based on this viewpoint, the consciousness-only theory of Buddhism says that the phenomenal world is the product of self's mind. Therefore, it neither negates the external world as the object in itself, nor denies other selves.

（広島哲学会会誌『哲学』第 70 集掲載論文）